

伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅱ
御願塚古墳外堤部の調査

1993年3月

伊丹市教育委員会



御願塚古墳遠景（西南より）



御願塚古墳全景

序文

伊丹市内には、国指定史跡伊丹廃寺跡・有岡城跡とならんで口酒井遺跡、御願塚古墳といった貴重な遺跡が数多く所在しています。

御願塚古墳は、伊丹市南郊の平地部にあり、周濠をめぐらした5世紀代の帆立貝式前方後円墳として比較的よくその景観をとどめており、昭和41年3月には、兵庫県の史跡に指定されています。

御願塚古墳の調査は、昭和44年度に古墳の環境整備工事に伴い、周濠部と外堤部で実施したことがありますが、墳丘部の調査は行なわれていないため、内部の構造等はいまだ明らかではありません。

今回の調査は、御願塚古墳の隣接地において計画された住宅建築工事に伴うものです。

この埋蔵文化財調査概報は、伊丹市教育委員会が昭和62年度から平成3年度に実施した発掘調査（3調査区）をまとめました。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた関係各位のみなさまに心より厚く御礼申し上げます。

平成5年3月
伊丹市教育委員会
教育長 乾 一雄

例 言

- (1) 本書は、兵庫県伊丹市御願塚4丁目に所在する御願塚古墳の発掘調査成果をまとめたものである。
- (2) 御願塚古墳の発掘調査は、昭和44年に実施した環境整備に伴う調査を当古墳の第1次調査とし、現在までに4次調査が実施されている。
- (3) 本書所載の成果のうち、第3次調査と第4次調査については個人住宅建設に伴い国庫補助事業として実施した。また、第2次調査は店舗付共同住宅建設に伴い民間事業者の費用負担によって実施したものである。
- (4) 発掘調査は伊丹市教育委員会が調査主体となって実施した。
- (5) 発掘調査の担当者は次のとおりである。

第2次調査	小長谷正治、橋本正幸が担当し、西原雄大、伊藤潔、山本勝也、村下佳子が補佐した。
第3次調査	小長谷正治、細川佳子が担当した。
第4次調査	小長谷正治が担当し、伊藤秀樹が補佐した。

(6) 事務局

(昭和62年度)	(平成3・4年度)
教 育 長 佐坂茂男	教 育 長 乾 一雄
教 育 次 長 宮崎昌大	教 育 次 長 石井俊明
社会教育部長 笹倉東一	生涯学習部次長 宮崎泰樹
社会教育課長 伊藤幸雄	＊ 主幹 千葉純一郎
社会教育課主査 平尾 毅	＊ 副主幹 垂伸一郎
＊ 垂伸一郎	事 務 吏 員 古川謙子
事 務 吏 員 川野文子	

- (7) 整理作業は平成4年12月から平成5年2月まで実施した。遺物の実測、トレースなどの作業は、三輪隆子、沖高広子、岡野理奈が行なった。
- (8) 本書の執筆は、遺構を細川、その他を小長谷が行なった。
- (9) 本書所載の資料は伊丹市教育委員会にて保管している。
- (10) 遺物図版中の()内の数字は遺物実測図の番号のことである。

目 次

I	遺跡の概要	1
II	調査の概要	3
III-1	第2次調査	5
-2	第3次調査	13
-3	第4次調査	19
IV	まとめ	23

I 遺跡の概要

位置と環境

御願塚古墳の所在する伊丹市は、北を川西市・宝塚市、西を西宮市、南を尼崎市、そして東を大阪府池田市と豊中市に周囲を囲まれ、市域に山を持たない平坦な地形となっている。少し詳しくみてみると、市域の大半は北摂山地に端を発する伊丹台地が占めており、その東西は、東が猪名川、西が武庫川によって挟まれた地形となっていることがわかる。伊丹台地は標高40mから5m、北から南に向かって緩やかに傾斜しており、標高5mあたりで尼崎平野に没している。

遺跡の分布を地形との関係でみると、猪名川流域の沖積地には、大阪空港内遺跡、口酒井遺跡、田能遺跡などがあり、縄文時代晩期から弥生時代にわたる遺跡が密度高く分布している。伊丹台地上には、弥生時代・古墳時代の集落跡は少なく、御願塚古墳等の中期古墳が台地の南縁に散在するほかは、台地の中央部に奈良時代の寺院跡である伊丹廃寺跡や中世の有岡城跡などの遺跡が分布している。

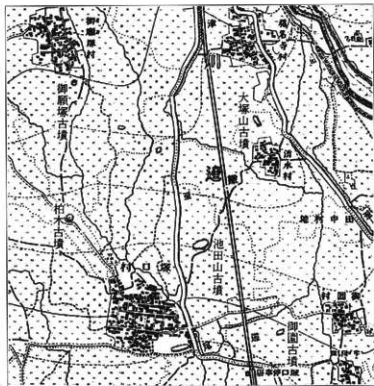


図1. 地形図 1/50,000 (大阪西北部)

猪名野古墳群

伊丹市城の南端から尼崎市域にかけての伊丹台地上には、かつて中期古墳が多数分布していたことが知られている。しかし残念ながら、池田山古墳・大塚山古墳など主要な古墳は本格的な調査が行なわれなまま消滅しており、古墳のまともに残っているものは、御願塚古墳のほか数基となっている。まだこの地域に開発の手が及んでいなかった明治18年当時の地形図（図2）を見てみると、御願塚古墳の南東1Kmのところ、古墳群中最大規模の池田山古墳（全長71mの前方後円墳）があり、ここを中心に半径1Kmの範囲に大塚山古墳（全長42mの前方後円墳）、御園古墳（全長60mの前方後円墳）、柏木古墳（径38mの円墳）が位置している。いま揚げた古墳は主要なものであって、この範囲の中及び周辺には小規模なものを含めて20基余りの古墳が確認できる。

最近、同じく伊丹台東縁に位置する有岡城跡の発掘調査で古墳跡が相次いで発見された。一つは有岡城跡第20次調査において確認された「上薦塚古墳」、もう一つは同第73次調査で確認された「鶴塚古墳」である。ともに墳丘が有岡城惣構の要所を守る砦に利用されていたものと考えられ、上薦塚古墳は廃城後削平され、鶴塚古墳は墳丘は残るものかなり形状が変化している。両者とも出土した埴輪から、中期古墳と考えられる。さら



に有岡城主郭部付近から埴輪が出土しており、この当りにも中期古墳の存在が推定される。

このような有岡城内の古墳は、御願塚古墳から1.5Km～2Kmの距離があるが、伊丹台地の東縁に沿って位置しており、猪名野古墳群の一部と考えることもでき、今後併せて検討する必要がある。

図2. 猪名野古墳群の分布 1/20,000 明治20年

II 調査概要

御願塚古墳環境整備事業

御願塚古墳は、この地方の中期古墳中唯一全容を残す古墳として、昭和40年伊丹市、そして41年には兵庫県が史跡指定を行なった。しかし、周辺の宅地化が進み墳丘封土の崩壊や周濠が下水の溜池となるなど、古墳を取り巻く環境は憂慮される状態となっていた。そこで地元では「御願塚史跡保存会」を結成し、周濠の浄化と封土の修復などの環境整備を図ることになり、そして昭和44年、兵庫県・伊丹市・御願塚史跡保存会により具体的に環境整備に乗り出すことになった。

同年8月、ようやく具体案がまとまり、同月25日より事前調査が高井悌三郎氏を中心に橋本久氏等の手によって始められた。この調査の主目的は周濠の規模を確認することであり、周濠の外縁に沿ってトレンチが入れられた。調査の結果、周濠の東側・南側の規模が明らかにされ、これに従い整備が進められることになったのである。この調査が御願塚古墳における初めての考古学的調査で、後にこの調査を第1次調査として以後の調査次数を続けている。

外堤部の調査

御願塚古墳は、墳頂部に南神社が祀られ古墳全体が神域となっており、開発などから守られているが、周濠の外側は既に宅地化されて古墳の周りを民家が囲んでいる状態となっている。昭和62年になって、古墳東側の敷地において店舗付共同住宅建設が計画されることになった。この敷地は周濠から5mほど離れており、御願塚古墳と直接関連する遺構の存在する可能性は少ないと考えられたが、第1次調査の結果、外堤部に埴輪の樹立されていた可能性が指摘されていたため、確認調査を実施することにした。設定したトレンチは、できるだけ古墳寄りから始め、敷地の東端まで東西に長く入れることにした。重機を使って地山の深さまで掘り下げたところ、古墳寄りの場所に幅4mほどの溝が検出されたのである。この溝は幅に比して浅いものであったが、内部に多量の埴輪片を含んでいること、また、平面形をみると周濠に沿うように若干弧を描いて延びていることなどから、御願塚古墳の二重目の周濠ではないかと考えられた。しかし僅か1箇所の調査で周濠と断定することはできないため、この点については別の地点での確認を待って判断する必要がある。ただ外堤部の埴輪列については、溝中の埴輪の出土状態から、その存在が間違いないものとなった。そして南隣りで実施した第3次調査、古墳北側で実施した第4次調査で溝の続きを検出したことにより、二重周濠と判断するに至ったのである。

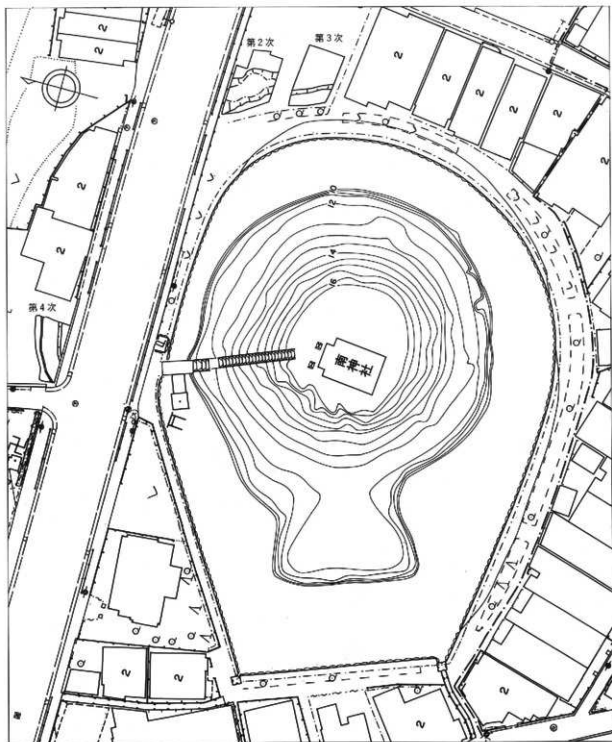


図3. 御願場古墳実測圖 1/500

Ⅲ-1 御願塚古墳 第2次調査

所在地 伊丹市御願塚4丁目345-11
調査面積 40m²
調査期間 昭和62年12月14日～12月26日

調査概要

発掘調査は、古墳の東側で実施した外堤部の調査である。調査地点は、県道東富松・御願塚線に沿ったところの南側に位置する。この地点は、御願塚古墳の周濠とは約5mの距離がある。

敷地内に2.5m×14mの調査区を設定して、重機によって表土掘削を開始した。約20cmの盛土があり、その下に約20cmの水田耕作土、さらにその下に約10cmの水田床土の堆積がみられる。これらを重機によって除去すると、調査区西側では、礫を多く含む黄褐色粘土層（地山）が検出され、すぐ東側では地山を掘り込んだ溝が検出された。このため、当初の調査区よりも北側に拡張し、溝の状態を確認した。

遺構

溝の規模は、幅3.5～4m、深さは最深部で30cmを測る。溝の検出長は7.4mである。溝の北側では県道下に続き、南側では幅を2.7mに縮小して、隣の家の下に延びていく。平面の形は、内側（古墳側）では、比較的乱れなく周濠に沿うように弧を描くのに対し、外側の線は一定していない。断面でみると、外側の立ち上がりは、内側の立ち上がりよりも一層緩やかになっている。

溝の埋土は、黒褐色粘土層で、その中に多くの埴輪片が認められた。埴輪の出土状況は溝以外のところからは全く出土せず、量的にみると、外側よりも内側（古墳側）の方に多くみられ、埴輪が明らかに古墳側から入り込んだと考えられる。この溝と内側の周濠との

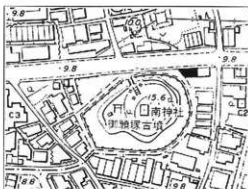


図4. 調査地点図 1/2,500



写真1. 調査区全景

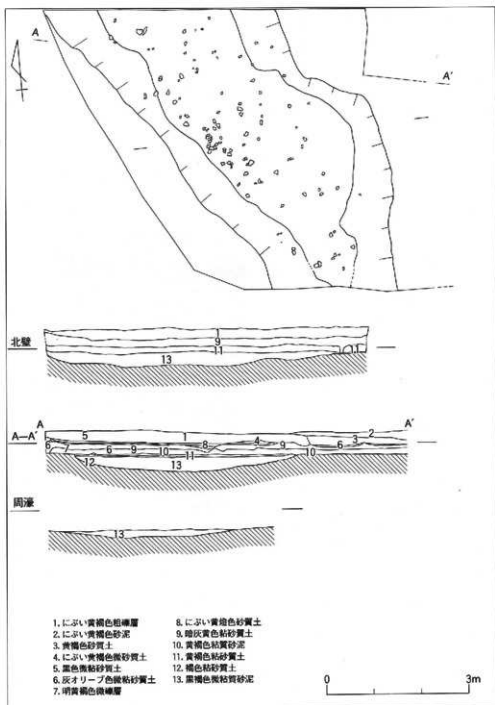


図5. 第2次調査実測図

間は、6.5～7mの距離がある。この間を古墳の外堤部とすると、埴輪の出土状況からみて、埴輪の原位置は外堤部であったと考えられ、この場所に埴輪の樹立されていたことをうか



写真2. 周濠全景（南より）



写真3. 埴輪出土状況

がわせるものである。この点については、これまで指摘されてきたが、今回の調査でより明らかになったといえよう。検出した溝については外堤部の埴輪列の存在を考えれば、周濠のさらに外側を巡る御願塚古墳の二重目の周濠となる可能性は極めて高いと考えられる。

遺物

周濠内より出土した遺物は約300点にのぼる。その内訳をみると、若干の須恵器・土師器・瓦器などを除いて埴輪が占めている。埴輪以外の遺物は、周濠が埋まっていく過程で後に入り込んだものと考えられ、時期

的にみて埴輪より年代の降るものである。図示した遺物は出土遺物中の一部であるが、埴輪については技法上分類した各種類を選んで掲載している。1と2は円筒埴輪の口縁部。器面の調整技法は、外面において「ヨコハケ」、内面では「ヘラナデ」が施され、口縁部のみ内外面を同時に「ヨコナデ」している。3は口縁部に近い破片と考えられる。内外面ともに「ヨコハケ」が施されている。4～11は突帯を有する胴部片である。このうち4・10・11には円形の透孔が穿たれている。器面調整はいずれも外面「ヨコハケ」、内面「ヘラナデ」となっている。外面の横方向の刷毛目「ヨコハケ」は、除切れることなく器面を全周している。突帯は低く断面が台形を呈している。7は中でも比較的大きな破片で、図上復元を行なった。それによると、胴部径は38～39cmとなる。

12～15は、外面縦方向の刷毛目（タテハケ）を施している。12は1次調整「タテハケ」

の後突帯を付けたもので、1～11のように2次調整の「ヨコハケ」を施していない。12と同種の破片は極めて少なく、他に数点を認めるのみである。13～15は12と異なり須恵質の埴輪である。胎土の色調は灰色ないし灰褐色を呈し、須恵器同様に硬質な焼成となっている。同種の破片は計9点出土している。13～15の特徴の一つは、内面に粘土紐の巻き上げの痕を明瞭に残していることにある。13は粘土紐巻き上げの後、指で押さえただけとなるが、14はその上に「ヨコハケ」を施している。

16と17は須恵器の平瓶である。17は胴部下半部、16はその把手で、同一個体の可能性もある。この他に図示できなかったが、瓦器碗の破片も濠中より出土しており、濠が完全に埋まるのは中世頃であったことが判明した。

18は形象埴輪の一種の蓋形埴輪と考えられる。この破片は蓋形埴輪の笠の部分で、内外面はかなり磨滅しているため調整技法など確認できない。また、写真6-17は形象埴輪の一部とも考えられるが器種は明らかでない。

次に埴輪の出土状態について説明しておきたい。埴輪は濠の内側、つまり古墳寄りから集中して出土した。このことは、出土した埴輪の原位置が二重の周濠の間にあることを示している。この外堤部の埴輪列は、これまでの調査では直接確認できていないが、今回の調査でその存在がほぼ確実なものとなった。また、出土した埴輪片の中に基底部片が1点も含まれていないことから、外堤部に埴輪の基底部が残されているとも考えられ、今後外堤部の調査を実施し直接埴輪列の確認を行なう必要がある。

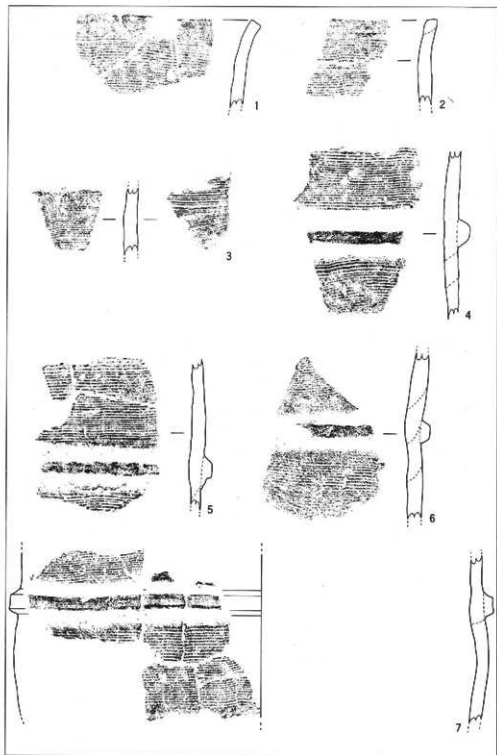


圖6. 第2次調查出土遺物 (1) (1/3)

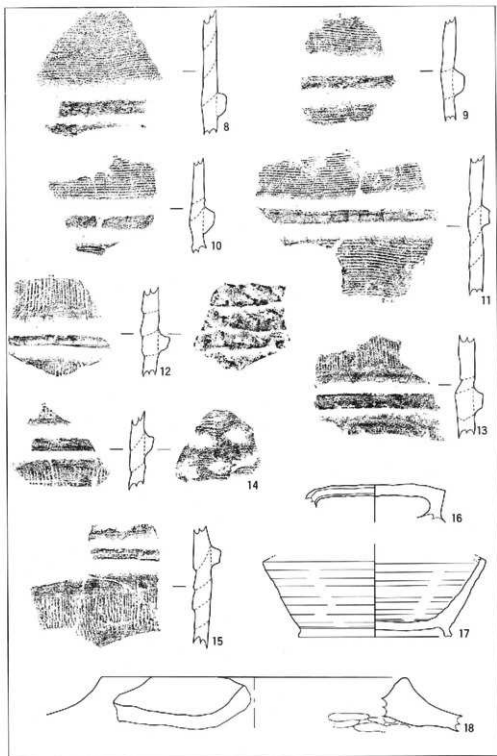


図7. 第2次調査出土遺物 (2) (1/3)

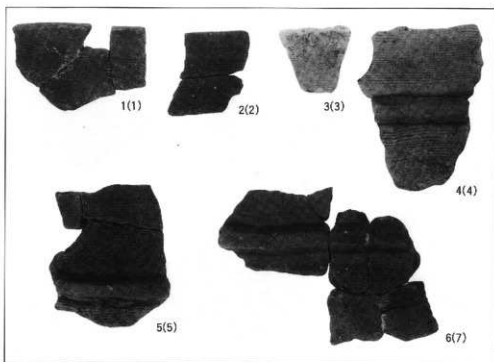


写真4. 第2次調査出土遺物(1)

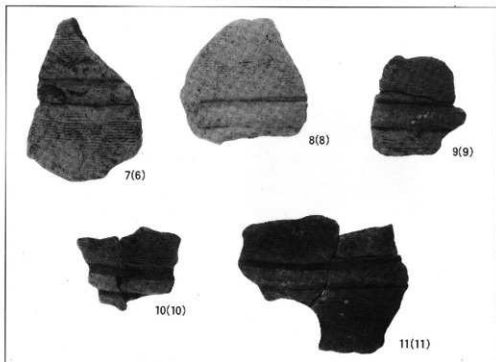


写真5. 第2次調査出土遺物(2)

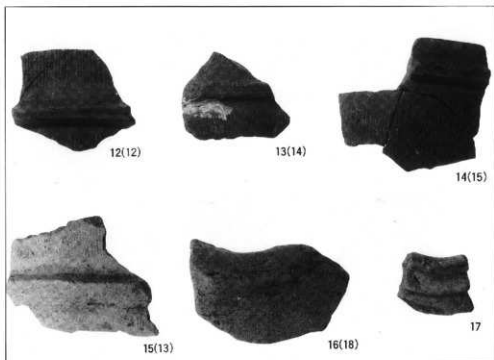


写真6. 第2次調査出土遺物(3)

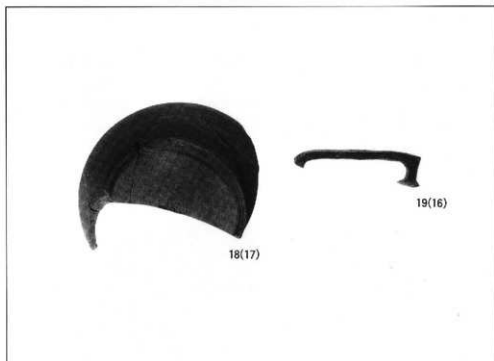


写真7. 第2次調査出土遺物(4)

Ⅲ-2 御願塚古墳 第3次調査

所在地 伊丹市御願塚4丁目345-2

調査面積 37m²

調査期間 平成4年1月20日～1月25日



図8. 調査地点図 1/2,500

調査概要

今回の調査は、昭和62年度の第2次調査地点の南隣りに位置する。第2次調査では、周濠の外側に二重目の周濠を発見したが、今回も、これに続く外側の周濠を確認する調査である。

敷地内に調査区を設定し、重機によって調査区の西側より表土掘削を開始した。40～50cm掘り下げると、調査区の西側では、礫を多く含む黄褐色粘土層（地山）が現れ、そのすぐ東側では、褐色粘土層と黒褐色粘土層が広がっていた。これは、第2次調査の周濠の埋土と同じであることから、外側の周濠と考えられた。しかしこの範囲で検出できたのは、周濠の内側の立ち上がりであり、外側の立ち上がりについては、調査区外となっていた。そのため、調査区を東側に拡張することにして、外側の立ち上がりの確認を行なった。

遺構

周濠は、第2次調査では、幅3.5～4m、深さ30cmの規模であったが、当地点では幅5m以上に広がっていることが確認された。周濠の内側はやや急勾配で立ち上がり、外側は緩やかに立ち上がっていく。当地点での周濠の幅については、外側の立ち上がりを明確に確認することはできなかったため、推定値となるが、調査区北東隅あたりを周濠の東限とすると、幅5.7mとなる。深さは最深部で30cmとなる。第3次調査での検出長は約5mである。

遺物は、埴輪と須恵器の小片が周濠内より出土した。出土状況は、周濠の埋土中でも上部では少なく、下部に近い方が多かった。中には、濠底にへばりついているものもあった。また、遺物の出土量は周濠の外側よりも内側の方に集中していた。埴輪の中には円筒埴輪に混って、蓋形埴輪が含まれていた。

出土遺物

第3次調査地点は、第2次調査地点の隣接地であるにもかかわらず埴輪の出土量は少なかった。また破片も小さく磨滅したものが多かった。ただ円筒埴輪の種類は第2次調査と同様である。

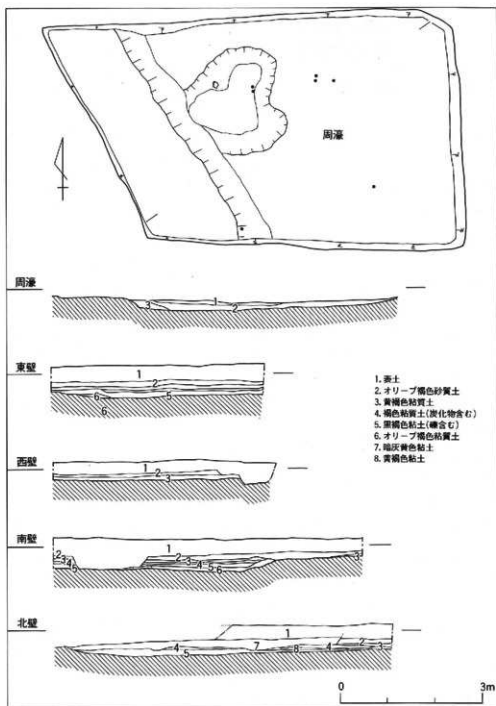


図9. 第3次調査実測図

1と3は外面に「ヨコハケ」が施され、内面は「ヘラナデ」となっている。2は、外面に1次調整の「タテハケ」が残る。内面にも「タテハケ」が施されているが、突帯裏の部分



写真8. 調査区より御願塚古墳を望む



写真9. 調査区全景(西より)

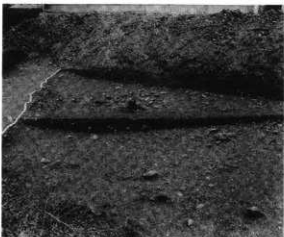


写真10. 周濠検出状況

分のみ「ヘラナデ」を行なっている。

4は、外面に細い「ナナメハケ」が施され、内面にも不定方向の細い刷毛目が施されている。

5～12は磨滅が著しく調整技法は不明である。

13と14は第2次調査でも出土している須恵質の円筒埴輪である。ともに1次調整「タテハケ」の後突帯を貼付け、そして突帯の上下のみ「ヨコナデ」を施したものである。内面には「ヨコハケ」が施されているが、その下に粘土紐巻き上げの痕が明瞭に残っている。

15は蓋形埴輪の笠の部分と考えられる。外面は「ヘラナデ」により整形されている。

16は須恵器直口壺の口縁部で、17も須恵器壺の底部である。

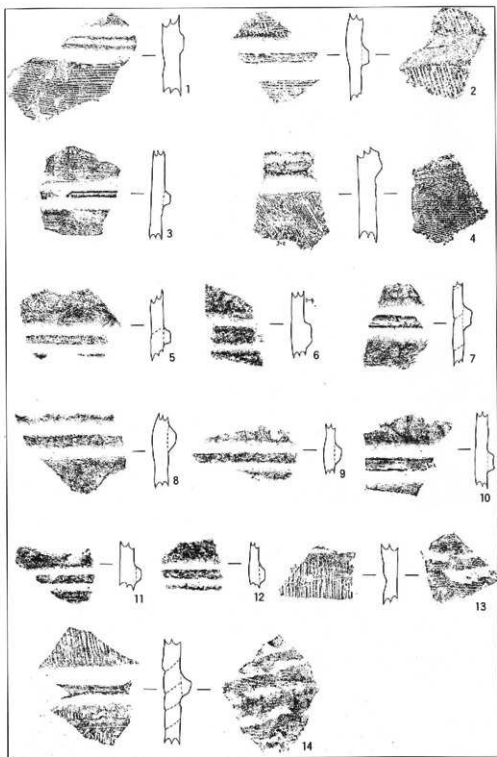


图10. 第3次調査出土遺物 (1) (1/3)

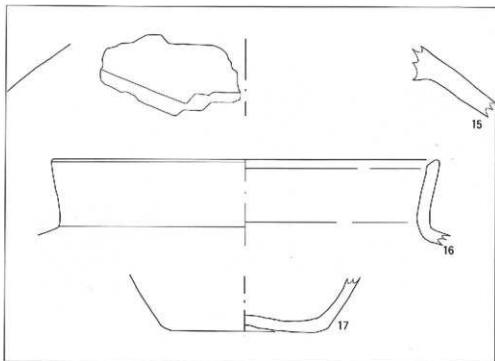


図11. 第3次調査出土遺物 (2) (1/3)

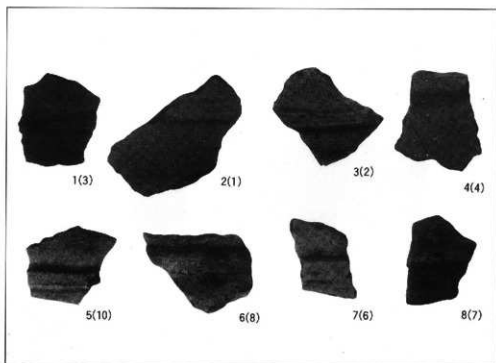


写真11. 第3次調査出土遺物 (1)

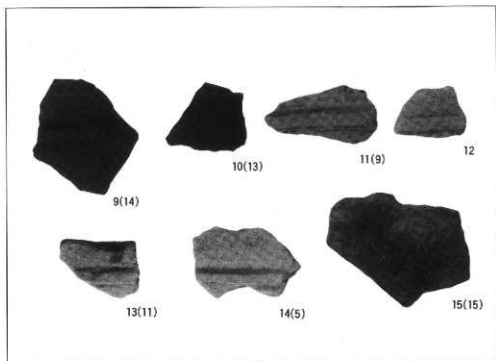


写真12. 第3次調査出土遺物(2)

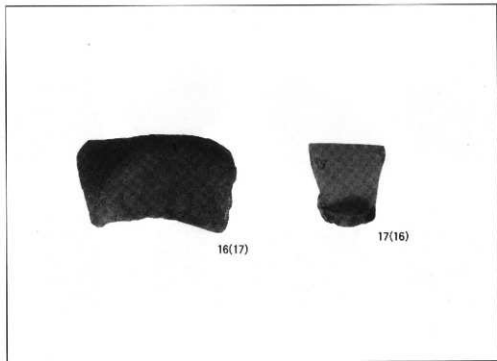


写真13. 第3次調査出土遺物(3)

Ⅲ-3 御願塚古墳 第4次調査

所在地 伊丹市御願塚4丁目345-9
調査面積 26m²
調査期間 平成4年12月11日～12月16日



図12. 調査地点図 1/2,500

調査概要

今回の調査は、古墳の北側で実施した外堤部の調査である。今回の調査地点は、昭和62年度に実施した第2次調査地点と道路（県道東宮松・御願塚線）を挟んで北側に位置する。今回の調査は第2次調査で発見した二重目の周濠が、古墳の北側でも巡っているか否かを確認するための調査である。

敷地内に調査区を南側の道路に沿って東西に細長く設定し、重機によって、表土掘削を開始した。約40cmの盛土があり、重機によってこれを除去した。その下に10～20cmのオリブ黒色土層（水田耕作土）の堆積がみられ、さらにその下には10～15cmの黄褐色粘土層（水田床土）の堆積がみられる。この水田床土を掘り下げると、調査区北側では、礫を多く含む黄褐色粘土層（地山）が現れ、調査区北端から30～50cm南側で溝状の遺構が検出された。これは、第2次調査・第3次調査で検出した外側の周濠と同じ円周上に存在することから、外側の周濠と考えられた。ここで検出されたのは、周濠の外側の立ち上がりであ



写真14. 調査区全景(東より)

る。内側の立ち上がりは、南側の道路敷の下にあると考えられるため、確認できなかった。

遺構

周濠の外側の立ち上がりのみを検出したので、周濠の幅は不明であるが、検出幅は最大で3.3m、検出長は約8.5m、深さは最深部で25cmを測る。周濠は二段階に落ちていく。外側の立ち上がりは

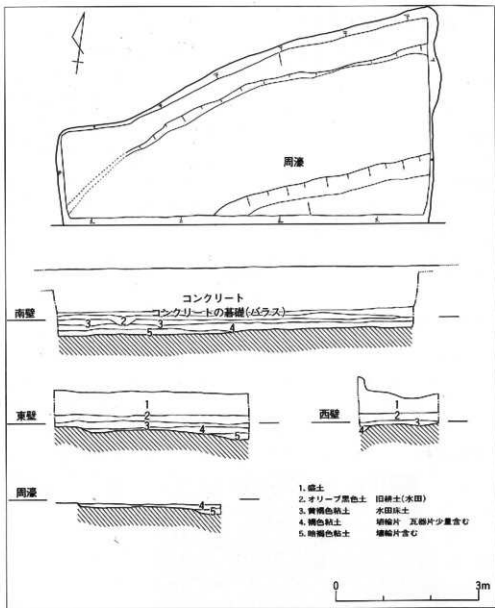


図13. 第4次調査実測図

緩やかで、深さは10cm、そこから2.4~2.5mの平坦な底面が続き、そして再度、10~15cmの深さで緩やかに落ちていく。周濠の平面形は、弧を描いて南西方向に延びていき、その内側の一段落ちたところも、外側の立ち上がりに沿って延びている。

溝の中は、上層が灰色粘土を斑状に含む褐色粘土層で、埴輪片・瓦器碗片を少量含む。下層が暗褐色粘土層で、埴輪片を含む。遺物の出土状況は、第2次・第3次調査地点と比較すると、ごく少量に過ぎない。このことは、埴輪の出土状況が周濠の内側に集中すると



写真15. 周濠検出状況



写真16. 埴輪出土状況

いうこれまでの調査事例からみて当然の結果で、道路敷下の調査が実施されれば、多くの埴輪が出土するものと考えられる。

出土遺物

第4次調査地点は、周濠の外縁部の調査であったため、周濠内より出土した遺物は極めて少なかった。図示できた3点の埴輪の他には、須恵器(写真17-7・8)と瓦器碗(写真17-9-11)の小片が出土した。

1は円筒埴輪の口縁部である。外面には「ヨコハケ」が施されている。2と3は円筒埴輪の胴部片である。磨滅が著しく調整技法などは不明である。

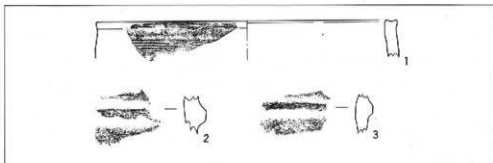


図14. 第4次調査出土遺物 (1/3)

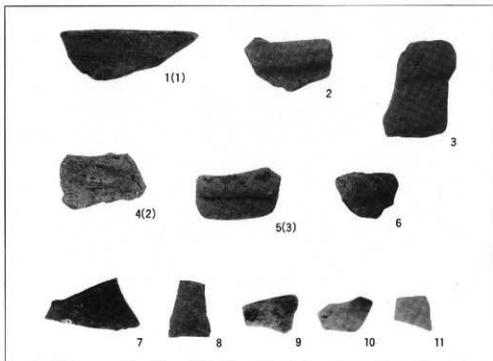


写真17. 第4次調査出土遺物

Ⅳ ま と め

御願塚古墳の発掘調査は、昭和44年に実施された御願塚古墳環境設備に伴う発掘調査を第1次調査とし、今回報告した第2次調査から第4次調査までの4回実施された。第1次調査は周濠の規模を確認し、その成果をもって周濠復元に備えるもので周濠外縁部に9箇所のトレンチを入れている(図15)。この調査の成果によると周濠の幅は「東、南側で7m以下で3m以上の規模であったことは否めない」とされており、外堤部については、地山の上に盛土されていたことが推定されているが、その高さ幅などは明らかにされていない。そして外堤部の埴輪列の存在については、「積極的に肯定する徴証は絶無」とある。このように、第1次調査では外堤部の9箇所にトレンチが掘られたにもかかわらず、外堤部の構造や埴輪列の存在については不明となっているが、今回報告する第2～4次調査の結果、外堤部の構造や埴輪列について新たな資料を得ることができた。以下、その要点を記してまとめたい。

(二重周濠)

第2次調査地点は御願塚古墳の東側、第1次調査で調査された第2トレンチの東側にあたる。当初はこの場所に二重目の周濠が巡っているとは予想していなかった。しかし、せめて敷地の最も古墳寄りにトレンチを入れて外堤部の埴輪列に関する新たな証拠を探りたいと考えていた。調査の結果、この場所に規模の小さな溝が存在し、しかも内部から多量の埴輪片が出土することが判明した。しかしこの段階では、この溝が二重目の周濠であるとの確証を得たわけではなく、別の地点でその続きを確認する必要がある。ただ、この溝が周濠に沿うように若干弧を描いていること、内部に多量の埴輪片が堆積していたことなどから、極めて御願塚古墳と関係の深い遺構であると判断されたのである。

第3次調査は、第2次調査地点の南に隣接した場所での調査である。この地点で溝の延長部が確認されたことにより、二重周濠の可能性が極めて高くなった。そして古墳の北側で実施した第4次調査において、溝の続きを確認できたことにより、これで少なくとも古墳の東側から北側にかけては溝が巡ることが判明した。

(外堤部)

御願塚古墳が二重周濠を有する古墳であることが判明したが、現在わかる範囲で各々の

規模を確認しておきたい。古墳の東側では、後円部裾から外側の周濠までの距離は14m余りであるから、内側の周濠幅を7mとすると、外堤部の幅は7mとなる。これは第2次調査地点での数値であり、南側の第3次調査地点での幅は若干狭く6.5mとなっている。後円部の北側で実施した第4次調査は、外側周濠の外縁しか調査できていないので外堤部の幅は不明である。以上の結果からみて、内側の周濠幅が7mという条件付きながら、古墳の東側での外堤部幅は6.5~7mであったことが判る。

(外側の周濠)

外側の周濠の規模は、内側の周濠に比べ小規模で、しかも整った形を成していない。とくに周濠の外縁は不整形で、第2次調査地点のように濠幅が一定していない。濠幅は第2次調査では3.5~4m、第3次調査地点では5.7mに拡大する。深さは第2次調査地点で30cm、第3次調査地点で20~30cmとなり、内側の周濠が1m程度の深さであるのに対し、かなり浅いものになっている。また、第4次調査地点では、周濠底が2段に落ちる構造となっており内側に向けて深くなっていることが判った。

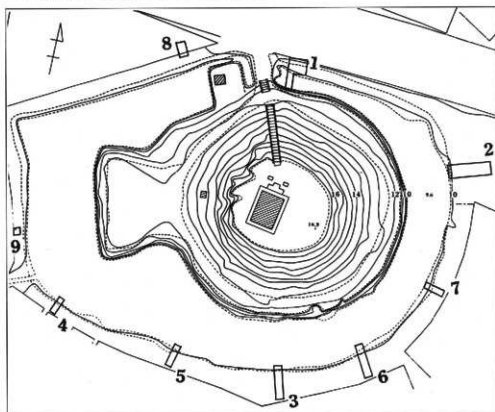


図15. 第1次調査(昭和44年)トレンチ設定図

外側の周濠の幅については、近接して調査した第2次調査と第3次調査で大きく差があるため、元々このように不整形に掘られていたと考えていたが、第4次調査では周濠の外縁の線が整っており、内側の周濠に沿った形で検出された。この第4次調査地点は、大きな削平や攪乱された跡が認められないことから、むしろ第2次調査地点の周濠が後世の削平などを受けたためいびつな形となったとも考えられる。そうであるとなると、外側の周濠の規模は、第3次調査地点にみられる5.7mの数値に近いかも知れない。

(外堤部の埴輪)

外側の周濠から埴輪片が多く出土している。その出土状況をもてみると、周濠の内側から多く出土するなど、明らかに外堤部から徐々に流入してきたものと考えられ、外堤部に埴輪列の存在を示している。ところが、第2次調査地点のすぐ西側の外堤部に入れた第1次調査第2トレンチでは、外堤部を横切るようにトレンチが掘られたにもかかわらず、埴輪の小片などが出土しただけで埴輪列は確認されていない。さらに南側に入れられた第6・第3トレンチでも埴輪片は出土するが、埴輪列そのものは確認できていないのである。

今回報告した外側周濠内の埴輪の在り方からは、その原位置が外堤部の埴輪列以外では理解できない以上、外堤部が後世削平を受けたと考えるしかない。いずれにせよ、すべて削平されたことも考えられないので、今後の調査で確認していきたい。

最後に埴輪について述べておきたい。周濠中より出土した円筒埴輪には、技法上による分類では大きく3種類存在する。1は、外面の調整技法が1次調整「タテハケ」の後2次調整に「ヨコハケ」を施したもので、このヨコハケは川西宏幸氏の分類によるB種ヨコハケに該当する。内面は「ヘラナデ」によって平滑に仕上げられている。2は、1次調整「タテハケ」のままで、2次調整を行わないもの。内面には粘土紐巻き上げの痕を明瞭に残している。色調はやや白っぽい。出土量は極めて少ない。3は、須恵質の円筒埴輪である。出土した須恵質の円筒埴輪は全体から見ると少数で、第2次・第3次調査において各々出土している。器面の調整技法の特徴は、外面が1次調整「タテハケ」のみとなって簡略化されており、内面についても「ヨコハケ」によって粘土紐巻き上げ痕を消そうとしているが、完全に消せずに残るなどやはり調整工程の簡略化が認められる。

埴輪の時期については、須恵質の円筒埴輪と外面が「タテハケ」調整のみの埴輪が少量ながら含まれているところから、川西宏幸氏の編年ではⅣ期に比定され古墳時代中期後半の時期を求めることができよう。

註1. 高井佛三郎 「御願塚古墳環境整備に伴う発掘調査概報」 伊丹市教育委員会 1971年

註2. 拙稿 「御願塚古墳最近の調査」『地域研究いたみ』第18号 伊丹市役所 1989年

註3. 川西宏辛 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978年

註4. 註3に同じ

伊丹市埋蔵文化財調査報告書第17集

伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅱ
御願塚古墳外堤部の調査

1993年3月発行

発行 伊丹市教育委員会生涯学習部
社会教育担当
〒664 兵庫県伊丹市千僧1丁目
TEL (0727) 83-1234

印刷 有限会社 広 研

